

音楽科の「深い学び」を実現する授業づくり

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力

学びに向かう力、人間性

- ・ 音楽を愛好する心情
- ・ 音楽に対する豊かな感性
- ・ 音楽に親しんでいく態度

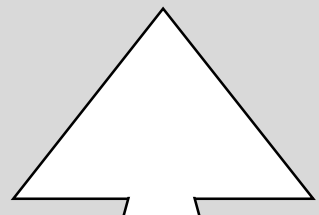
豊かな
情操

知識及び技能

- ・ 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性を理解する
- ・ 創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける
- ・ 音楽を形づくっている要素などについて、音楽における働きと関わらせて理解する

思考力、判断力、表現力等

- ・ 知識や技能を習得・活用しながら、音楽表現を創意工夫する
- ・ 知識を習得・活用しながら、音楽のよさや美しさを味わって聴く
- ・ 音楽を形づくっている要素や構造の知覚・感受と、その関わりについて考える



実感を伴った理解

知識や技能を発揮・活用

必要性

思いや意図

知識

技能

技能

思考

表現

知覚・感受したことを音や音楽で確認

音楽的な見方・考え方

知識

知識

音楽的な見方・考え方

〔共通事項〕を

支えとした

表現及び鑑賞の幅広い活動

音楽的な見方・考え方

半判断

繰り返しながら

音楽科の「見方・考え方」について

左図は音楽科の『深い学び』を実現する授業づくりの概要を示している。上部は音楽科で育成したい資質・能力である。「深い学び」を実現するためには、この三つの資質・能力が相互に関連し合うことが必要であり、その鍵となるのが「音楽的な見方・考え方」である。

学習指導要領解説では、「音楽的な見方・考え方」とは「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などに関連付けること」と示されている。音楽科の学習の基盤は、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚すること、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること、そして、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えるという一連の過程であり、対象となる音や音楽を知覚・感受するときに、生徒の音楽に対する感性が働いている。その支えとなっているのが、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力である〔共通事項〕である。音楽に対する感性を働かせて、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取ることを積み重ねていくことで、音楽科の本質とも言える豊かな情操が育成されていく。では、生徒は音楽の学習の中でどのような視点で音や音楽を知覚・感受し、どのような考え方で思考していくのか。以下に音楽的な「見方・考え方」を「見方」と「考え方」に分けて整理した。

「音楽的な見方」

「見方」が「どのように対象を捉えるか」だとすれば、「音楽的な見方」とは、「音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点」で音や音楽を知覚・感受することと言える。対象となる音や音楽固有の雰囲気や表情、味わいなどが、どのような要素によって生み出されているか、創意工夫を生かした表現で演奏するにはどのような音がふさわしいのか、なぜその音がふさわしいのかなどを考えていく際の視点となる。〔共通事項〕に示されている音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素を手がかりにすれば、それらに加えて例えば言葉の抑揚、発声法、その要素同士がどう関わっているかなど、さらに細かい視点で捉えることができる。これは、これまでの授業づくりでも大切にされてきたことであり、音楽科特有の対象を捉える視点、つまり音楽科の本質に直結する視点とも言える。

「音楽的な考え方」

「音楽的な考え方」とは、感性を働かせ、「音楽的な見方」で捉えた音や音楽を「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化など」と関連付けて思考することである。音楽表現を創意工夫していく過程や音楽のよさや美しさを味わう過程で、音や音楽とこれらとの関わりについて考えることは、音楽が果たす役割や音楽の存在意義、価値を考えることや、音楽科で育成したい資質・能力の獲得に向けて学びを一層深めることにつながると思う。

「音楽的な見方・考え方」は左図のように、知識や技能の習得の場面、思考・判断・表現を繰り返しながら創意工夫したりよさや美しさを味わったりしている場面のそれぞれで働いており、さらにそれらの場面が相互に関連し合う際にも働いている。また、見方と考え方は〔共通事項〕を支えとしてつながっている。教師が働かせたい「見方・考え方」を明確にし、学習課題と問いを吟味して授業づくりを行うことが、深い学びの実現に向けて重要である。